

佳作

ライバルの存在

千葉県松戸市立和名ヶ谷中学校三年 伊原カティア

舞台そで。ライトが眩しい。緞帳が上がり、曲が流れ始める。観客のざわめきが次第に薄れ、走るように高鳴る心臓の音が私の身体に響く。涙があふれ出しそうなのをぐっとこらえ、私は深呼吸をした。

一年前、私は人生で初めてどん底に落ちた。今までライバルだなんて思ったこともなかった彼女が突然、ライバルになった。小さい頃から一緒に踊っていた私たちは、双子のように揃った踊りをするところから、教室でも話題になっていった。「私たち二人はいつも一緒」が日常で、あたりまえのことのように感じていた。みんなから可愛いがられ、高揚感に包まれる。そんな日々が大好きだった。

夏、私の幸せな日々は突如終わりを告げた。

「今年の発表会の配役表を配ります。」

先生の声が響く。もうそんな時期かと私は時の流

れを感じていた。配られた配役表に目を通す。時が止まったような感覚と共に、鈍器で頭を殴られたような衝撃が全身に走った。

「え？」

私は思わず、そう発してしまった。嘘だ、そんなはずない。何度も何度も配役表を見返した。でも、同じだった。主役の文字と彼女の名前で私の頭はいっぱいになった。教室がざわつき、全身からじわじわと妙な汗が流れているのがわかった。それから一週間が経った。私は練習に全く身が入らず、しかるが増えた。泣きたかった。なんで私じゃないのだろうと思う日々。彼女がにくかった。彼女が自主練をしているのを横目に、私は帰り支度を始めた。怒りなのかにくしみなのかよくわからない感情が渦巻き、蓄積される。その時だった。「パシン」と大きな音が響いた。左頬が熱い。私の視線の先には、彼女がいた。

「こんなことであなたがやる気無くしてどうすんのよ。私たちは一番の相棒で一番のライバルでしょ。あんたは上手だから私、負けないように練習してただけ。今までずっとそうやって一緒にやってきたじゃない。」

泣きながら抱きついてきた彼女は震えていた。そこではっとした。怖かったのだ。二人が離れていくのが。私たちは同じだった。彼女が勇気を出してくれた行動とその言葉で、人はこんなにも温かいものだど気がついた。彼女の一番のライバルが私でよかった。心の底からそう思えた。

舞台そで。ライトが眩しい。去年彼女が見た光景を目の当たりにした今、この日までの一年間が一本の映画のように脳内に流れた。彼女が私の背中をポンと叩く。

「大丈夫。私にもできたんだから。」

涙があふれ出しそうなのをぐっとこらえ、私は深呼吸をした。一年前のどん底が、私を大きく成長させた。彼女のおかげだ。私よりもずっと大人な彼女だけけど、私たち二人はこれからも共に成長していく。今はただ、世界一のありがたいを彼女に伝えたい。